

シンポジウム：尿路性器結核の昨日・今日・明日

第22回日本泌尿器科中部連合地方会

司会 篠田 孝 (トヨタ病院)

発言者 友吉 唯夫 (京都大学) 瀬川 昭夫 (名古屋大学)

岡島 英五郎 (奈良医大) 磯貝 和俊 (岐阜大学)

甲野 三郎 (大阪市大) 長谷川 真常 (富山市民病院)

特別発言者 広岡 九兵衛 (神戸大学) 徳永 毅 (長崎大学)

SYMPOSIUM: YESTERDAY, TODAY, AND TOMORROW
OF URO-GENITAL TUBERCULOSISFROM THE 22ND CENTRAL SECTION MEETING OF JAPANESE
UROLOGICAL ASSOCIATION

Moderator: Dr. Takashi SHINODA

Speakers: Drs. Tadao TOMOYOSHI, Eigoro OKAZIMA, Saburo KONO,
Akio SEGAWA, Kazutoshi ISOGAI and Masatsune HASEGAWA

Guest Speakers: Drs. Kyubei HIROOKA and Tsuyoshi TOKUNAGA

司会のことは

只今よりシンポジウムを始めたいと思います。最近の日本の結核患者の実態につきましても、ご存じのように、過去20年の間に著明な減少をたどっております。

例えば、1945年ごろは人口10万に対する結核死亡率は200人を上まわっていましたが、つい最近わかりました、いちばん新しい1971年の統計では13.0というところまで落ちてきております。また1951—52年ごろまでは、死因の中のトップを結核が占めていましたが、そ

Table 1. 尿路性器結核患者の年度別・性別頻度 (中部地区)

年 度	外来患者数	尿 路 結 核			性 器 結 核			尿路性器結核患者総数
		男	女	合 計	尿路結核との合併	そ の 他	合 計	
1962	7,602	138	103	241	25	37	62	278
1963	14,565	122	101	223	36	32	68	255
1964	17,398	96	97	193	42	48	90	241
1965	18,854	102	101	203	49	40	89	243
1966	27,610	169	129	298	50	36	86	334
1967	45,794	333	257	590	60	66	126	656
1968	52,643	366	259	625	75	81	156	706
1969	59,399	257	297	554	72	93	165	647
1970	64,790	336	313	649	53	55	108	704
1971	62,968	293	279	572	33	74	107	646
合 計 (%)	371,623	2,212 (53.3%)	1,936 (46.7%)	4,148	495 (46.8%)	562 (53.2%)	1,057	4,710 (1.3%)

のご患者の減少とともにどんどん落ちてきて、1970年までに8位、1971年では9位に落ちて自殺に追い越されました。これは結核全般のデータからみたものでありますが、私どもの領域であります、尿路性器結核の実態はどうなっているものでありましようか。この点についてはこれから各講師からくわしく発表していただけるはずでございます。

私も、本シンポジウムの司会を承わってから、おくれげながら、最近10年間の当中部地区における臨床統計をとらせていただきましたので、スライドで簡単に発表させていただきます。本統計にご協力いただきましたのは、後述いたします、42機関の病院であります。この席をおかりして厚くお礼申しあげます。統計の対照となりました、総外来患者数は371,623名で、そのうち総結核患者数が4,710名、1.3%に相当いたします (Table 1)。

これらの患者の百分率を年次的にみてみますと、10年前の1962年には、尿路・性器結核あわせて2.4%でありましたが、昨年の1971年では1.0%に減少しております。しかしここ2～3年間はほぼ横ばいの傾向がみられます (Fig. 1)。

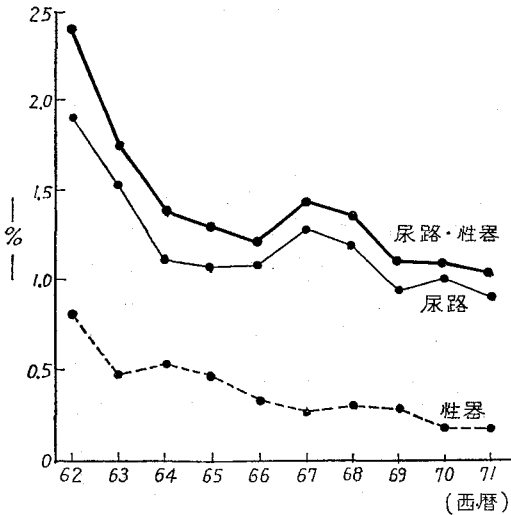


Fig. 1. 尿路性器結核患者の外来患者数に対する比率の年次的推移 (中部地区)

男女の比率は多少の出入はありますが、一般的にみて、男子がいくぶん多くなっています (Fig. 2)。

つぎに過去10年を5年ごとに2つに分けて、年齢分布を観察いたしました。いずれも30才台がピークとなっていますが、最近の5年間のほうが全体的にみて、いくぶん高年齢層のほうへ移行しております。これは結核一般についてもいわれていることでありますが、本統計におきましては、それほど著明ではありません

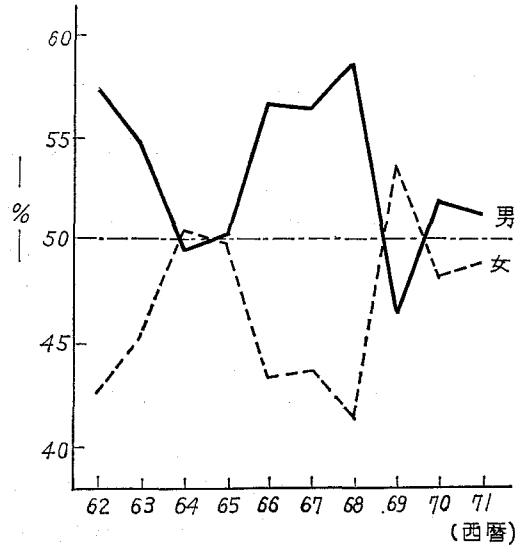


Fig. 2. 尿路結核患者の年度別男女比 (中部地区)

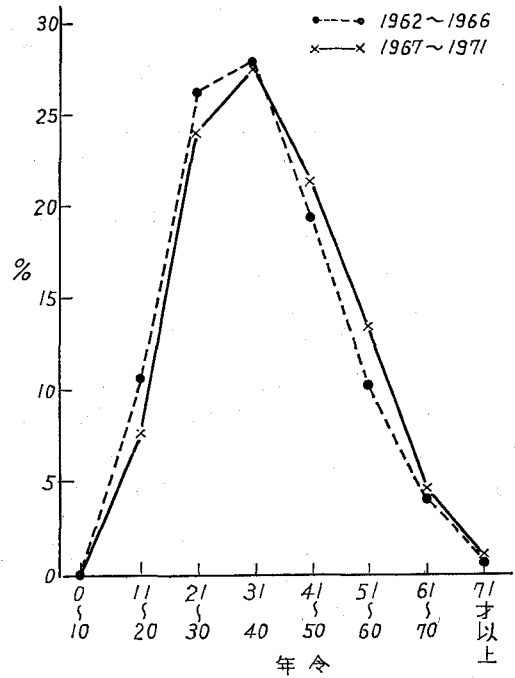


Fig. 3. 尿路結核患者の各5年間の百分率による年齢分布 (中部地区)

(Fig. 3)。

以上、簡単な統計ではありますが、当中部地区におきましても、過去10年間の結核罹患率の著しい減少をうかがうことができます。しかし、最近5年間の結核患者数にはあまり変動がないのであります。また、この2～3年間は減少率も低迷いたしております。これ

らの点に私どもは今すこし注目する必要があるように思います。

1951年に結核予防法が制定されてから、20年余が過ぎました。このあたりで、結核という病気を、量から質へと見方を変えて見なおさねばならない時期に立ち至っているのではないかと考えます。このようなときに、西浦会長が本シンポジウムを企画されましたことは、大変意義あることと存じます。これから各講師の活発なご意見を拝聴したいと存じます。

臨床統計に協力していただいた病院名を記して、各病院泌尿器科の諸先生に感謝の意を表します（順序不同）。

静岡県立、豊橋市民、市立岡崎、常滑市民、刈谷豊田、加茂、名古屋東市民、名城、国立名古屋、岐阜県立、岐阜市民、大垣市民、山田赤十字、市立伊勢総合、日本バプテスト、京都市立、国立京都、大阪通信、市立堺、大阪警察、大阪労災、大阪市立十三市民、大阪府立、市立豊中、富山市民、富山県立中央、農協滑川、公立石川中央、公立能登総合、福井県立、福井赤十字の各病院、および名古屋大学、名古屋市立大学、三重県立大学、奈良県立医科大学、和歌山県立医科大学、京都大学、大阪医科大学、大阪市立大学、関西医科大学、神戸大学、金沢大学の各医学部附属病院の以上中部地区42機関病院。